



## 平成28年度学術委員会学術第1小委員会報告 ポリファーマシー対策にかかる薬剤師の関与並びに有用性の 調査・研究

委員長

知命堂病院薬剤科

武藤 浩司 Koji MUTO

委員

春日部中央総合病院薬剤部

桜ヶ丘記念病院薬剤部

八木病院薬剤科

小田 慎 Makoto ODA

佐藤 康一 Koichi SATO

澁田 憲一 Kenichi SHIBUTA

太田総合病院薬剤部

草津病院薬剤課

宝塚市立病院薬剤部

樋島 学 Manabu TOYOSHIMA

別所 千枝 Kazue BESSHO

吉岡 睦展 Mutsunobu YOSHIOKA

### はじめに

学術第1小委員会は多剤投薬が行われている高齢患者を対象として、病院薬剤師の薬学的な視点・処方提案・多職種連携などがどのように影響を与えているかを調査することで、多剤投薬の効果的な回避方法や高齢者への適切で安全な薬物療法への関与方法を探索することを目的に平成27年4月に編成された。

平成28年診療報酬改定では「医薬品の適正使用」を推進するために、入院患者を対象として薬剤総合評価調整加算、外来患者を対象として薬剤総合評価調整管理料や連携管理加算が新設されたこともあり、全国規模の学術大会等でも多剤投薬に関する報告が増えてきている。一方、薬剤総合評価調整加算では、地域包括ケア病棟や障害者施設等入院基本料など一部病棟では算定できない状況となっているため、すべての病棟で多剤投薬に対する薬物有害事象等の回避や高齢者に対する適切で安全な薬物療法が行えているかについての検証も課題である。

今回、学術第1小委員会では平成28年度活動として、平成27年度に実施した予備調査<sup>1)</sup>の結果を受け、多剤投薬が行われている高齢患者を対象として、入院時と退院時での処方内容の変化に対し、入院期間中における病院薬剤師の薬学的な視点・処方提案・多職種連携などがどのように影響を与えているかなどを調査し、効果的なポリファーマシー回避方法を探索することを目的として施設調査と症例調査を実施した。また、多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の対応事例について事例集積活動を

行ったので報告する。

### 「多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の業務実態調査」の実施について

本調査は日本病院薬剤師会（以下、日病薬）臨床研究倫理審査委員会の承認（管理番号：27-002）を得て、平成28年7月19日～11月30日を調査期間とし、A票（患者情報を調査しない）：「多剤投薬に関する病院薬剤師の意識調査」にて施設の基礎数値並びに薬剤部（科）での業務の取り組み状況を調査し、B票（患者情報を調査）：「多剤投薬が行われている患者調査と病院薬剤師の業務調査」にて2016年3月1日～31日に退院された調査対象基準を満たす患者について、患者情報や入院期間中における病院薬剤師の業務内容を調査した。なお、施設の状態に応じてA票のみの回答、A票とB票の回答が行えるようにした。

### 本調査の実施と集計

募集期間における調査登録施設数が計438施設であり、A票では422施設、B票では80施設から414症例の調査協力が得られ、今回、集計作業の一部を報告する。なお、調査票や記載要項等は、日病薬ホームページに掲載されている\*。

A票の調査協力施設の概要を表に示す。また多剤投薬に関する意識調査等のなかで、過去1年間に外来または入院で最大20.9±6.95剤（n=394）を服薬されていた患者がいた経験を有しており、どの施設においても多剤

\*：日本病院薬剤師会ホームページ：https://jshp.jp/2016tazaitouyo\_chosa/

表 A票 (施設概要)

A票 (施設概要) 平成28年4月1日または平成28年4月データ			100床あたりの薬剤師数				病院種別		
			2未満	4未満	6未満	6以上	一般病院	療養型病院	精神科病院
薬剤師数 (常勤換算) ※常勤+非常勤の合計から算出	回答数	施設数	67	124	115	107	254	25	31
	人	中央値	3.6	5.07	14	22	16	4	4
薬剤師以外の事務職員 (常勤換算)	回答数	施設数	66	123	114	107	253	25	31
	人	中央値	1	1.5	2	2	2	0.5	1
1日平均在院患者数	回答数	施設数	66	123	114	107	253	23	31
	人	中央値	221.4	148.0	241.2	227.1	228.0	137.7	281.0
平均在院日数	回答数	施設数	27	52	58	53	124	12	9
	日	中央値	183	27.2	14.3	14	14	186.6	183
1ヵ月間の新規入院患者数	回答数	施設数	65	121	110	105	249	23	31
	人	中央値	40	120	430.5	480	432	20	38
1ヵ月間の退院患者数	回答数	施設数	65	122	109	105	248	24	31
	人	中央値	43	124.5	449	500	449	20.5	43
1) 病棟薬剤業務実施加算を算定している	回答数	施設数	64	122	113	107	253	24	31
	はい	施設数	3	31	59	84	148	5	0
	いいえ	施設数	61	91	54	23	105	19	31
	はい	%	4.7	25.4	52.2	78.5	58.5	20.8	0.0
	いいえ	%	95.3	74.6	47.8	21.5	41.5	79.2	100.0
①病棟薬剤業務の時間数/病棟/週 (*未算定施設も回答:概算で可)	回答数	施設数	26	77	84	97	200	17	11
	時間	中央値	5	15	22	23.8	23	12	4.55
2) 薬剤管理指導料を算定している	回答数	施設数	67	123	115	107	253	25	31
	はい	施設数	58	115	113	106	247	23	25
	いいえ	施設数	9	8	2	1	6	2	6
	はい	%	86.6	93.5	98.3	99.1	97.6	92.0	80.6
	いいえ	%	13.4	6.5	1.7	0.9	2.4	8.0	19.4
①薬剤管理指導料1 (380点:算定件数/月)	回答数	施設数	55	111	112	104	242	23	25
	件	中央値	25	61	221.5	249.5	216.5	25	19
②薬剤管理指導料2 (325点:算定件数/月)	回答数	施設数	55	112	111	106	245	22	24
	件	中央値	8	60	268	392	280	26.5	0.5
3) 退院時薬剤情報管理指導料を算定している	回答数	施設数	67	123	115	107	253	25	31
	はい	施設数	42	103	109	101	233	19	13
	いいえ	施設数	25	20	6	6	20	6	18
	はい	%	62.7	83.7	94.8	94.4	92.1	76.0	41.9
	いいえ	%	37.3	16.3	5.2	5.6	7.9	24.0	58.1
①退院時薬剤情報管理指導料 (算定件数/月)	回答数	施設数	41	101	108	101	231	19	13
	件	中央値	5	23	73.5	142	83	4	6
4) 退院時共同指導料を算定している	回答数	施設数	65	121	115	105	249	25	31
	はい	施設数	5	21	22	24	57	3	3
	いいえ	施設数	60	100	93	81	192	22	28
	はい	%	7.7	17.4	19.1	22.9	22.9	12.0	9.7
	いいえ	%	92.3	82.6	80.9	77.1	77.1	88.0	90.3
①退院時共同指導料 (算定件数/月)	回答数	施設数	5	20	22	23	55	3	3
	件	中央値	0	0	4	1	2	0	0
5) 在宅患者訪問薬剤管理指導料を算定している	回答数	施設数	63	122	113	105	248	25	30
	はい	施設数	4	6	9	1	5	5	2
	いいえ	施設数	59	116	104	104	243	20	28
	はい	%	6.3	4.9	8.0	1.0	2.0	20.0	6.7
	いいえ	%	93.7	95.1	92.0	99.0	98.0	80.0	93.3
①在宅患者訪問薬剤管理指導料 (算定件数/月)	回答数	施設数	4	6	9	1	5	5	2
	件	中央値	0	3.5	1	2	2	0	40.5

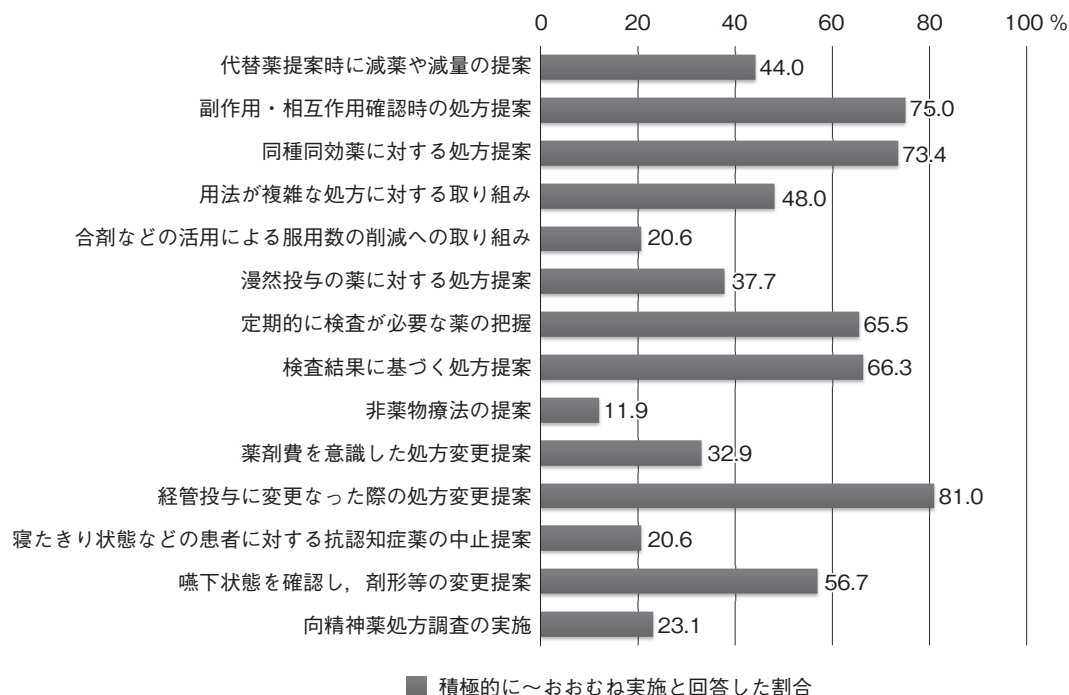


図1 薬剤部（科）における多剤投与削減に向けた取り組み状況

投薬の患者に対する対応が必要であることがわかった。薬物有害事象の情報共有で積極的に～おおむね実施と回答した群が63.0%であったが、多剤投与による有害事象の経験、減薬による日常生活動作（activities of daily living：以下、ADL）や意識レベルが改善した事例の情報共有で積極的に～おおむね実施と回答した群は、それぞれ37.2%、20.3%であり、多剤投与に関連する諸問題に対する情報共有は少ない状況であった。持参薬鑑別実施後における採用薬の提案や服薬計画の提案では積極的に～おおむね実施と回答した群は80%以上であったが、多剤投薬と捉えた場合に具体的な対応を行っているとの回答は60.3%であった。この多剤投薬に対し具体的な対応を行っている群における各種業務の実施率（積極的に～おおむね実施と回答した群）を図1に示す。減薬や減量提案、合剤の活用、抗認知症薬の中止など直接減薬に繋がる取り組みの実施は少ないが、副作用、相互作用、同種同効薬、検査確認、経管投与や嚥下困難など服薬状況など薬剤管理指導を通じて従来から実施されてきた薬学的管理項目に基づく処方提案の実施状況は高いことがわかった。多剤投薬削減に向けた取り組みは特別な業務ではなく、従来からの薬学的管理を通じて適切な処方提案の実施を優先する必要があることが示唆された。これらの多剤投薬削減の提案に向けての参考書やツールでは、高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015、各種疾患別ガイドライン（Mindsなど）の利

用は高い状況であったが、抗精神病薬における適切な薬物療法を支援するツールであるsafety correction of anti-psychotics poly-pharmacy and hi-dose（SCAP）法、薬原性錐体外路症状評価尺度（DIEPSS）、クロルプロマジン（CP）換算やジアゼパム換算などの等価換算等の利用は少なく、適切な処方提案を支援するためのツールの情報提供の必要性があると考えられた。また服薬アドヒアランスの改善に向けた取り組みでは残数確認、お薬手帳、患者・家族からの聴取、服薬困難状況や認知症の確認を実施していたが、服薬アドヒアランス評価ツールの利用状況は低く、Morisky score、Ask-12、DAI-10などは半数の施設で、知らないと回答しており、客観的な評価ツールの情報提供も必要であることがわかった。多職種との連携状況では、半数以上の施設においてチームで具体的な対応を実施していると回答していたが、医師以外との多職種連携状況が低く、また入院中の処方情報や減薬理由等を記載する退院時の薬剤管理サマリーも26.6%と実施割合が低い（図2）ため、多職種連携並びに退院後の情報提供等の実施率の向上が今後の課題であると考えられる。

B票の集計の一部を第25回医療薬学フォーラムで報告した<sup>2)</sup>。図3からは、急性期～慢性期のどの病期区分においても入院中は薬剤見直しの好機となり、特に回復期および慢性期では効果的であると考えられる。図4からは、入院時業務では薬剤鑑別に加え、持参薬の残数や日数確

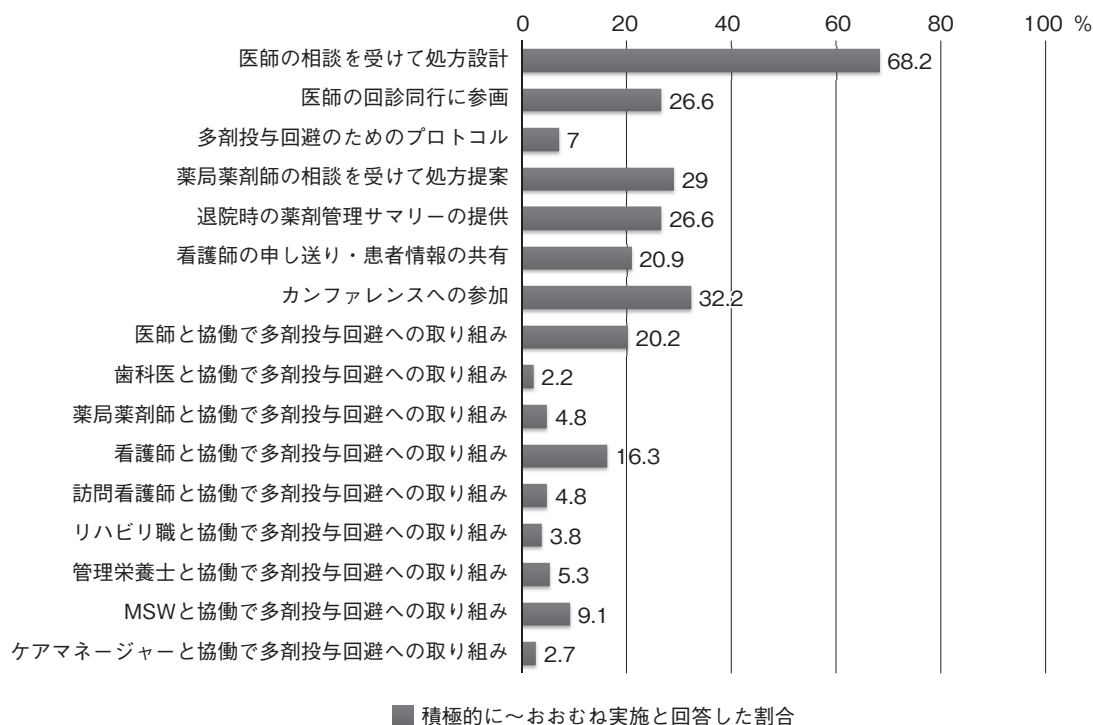


図2 薬剤部（科）における多職種との連携状況

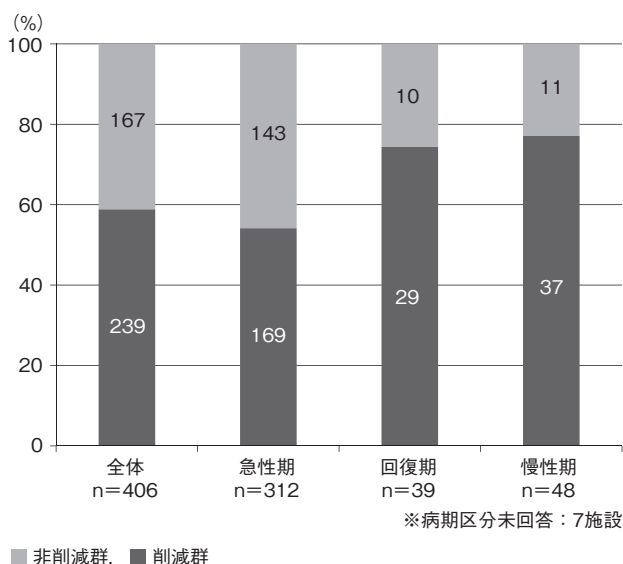


図3 病床機能区分における薬剤削減状況

認、お薬手帳や診療情報提供書の内容確認、代替薬の処方提案や服薬計画の提案、薬識や管理状況の確認については6割以上の症例で実施していた。入院中の業務内容では、設問全体として確認業務については8割以上の症例で実施されていた。

今後、これらの調査は多変量解析を用いて薬剤師の業務との関連についてさらに検証を進め、別途報告する予定である。

### 「多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の対応事例」の集積活動について

多剤投薬の実態調査におけるA票のなかで事例提出に協力が可能または条件付きに協力が可能と回答した164施設を対象として、「多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の対応事例」の集積活動を行うための記載様式（減薬目的、疾患群、処方見直し時の問題点、処方提案の内容、多職種とのかかわり、減薬後の経過、情報連携等）を作成し、調査協力依頼を行った。事例集は多剤投薬の患者を対象として、外来患者では介入が終了した患者、入院では退院した患者から各施設厳選して最大5症例とし、103事例/48施設から対応事例が得られた。その後、学術第1小委員会において本事例内容を精査・厳選し、(1)薬物有害事象の回避、(2)処方の煩雑さの軽減、(3)アドヒアランスの改善、(4)漫然投与に対する対応、(5)生活やADLなどの患者状況に応じた対応等に分類仕分けを行い、平成29年秋頃に「多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の対応事例集」として日病薬会員に対し、ホームページを介して公開できるよう準備を進めている。



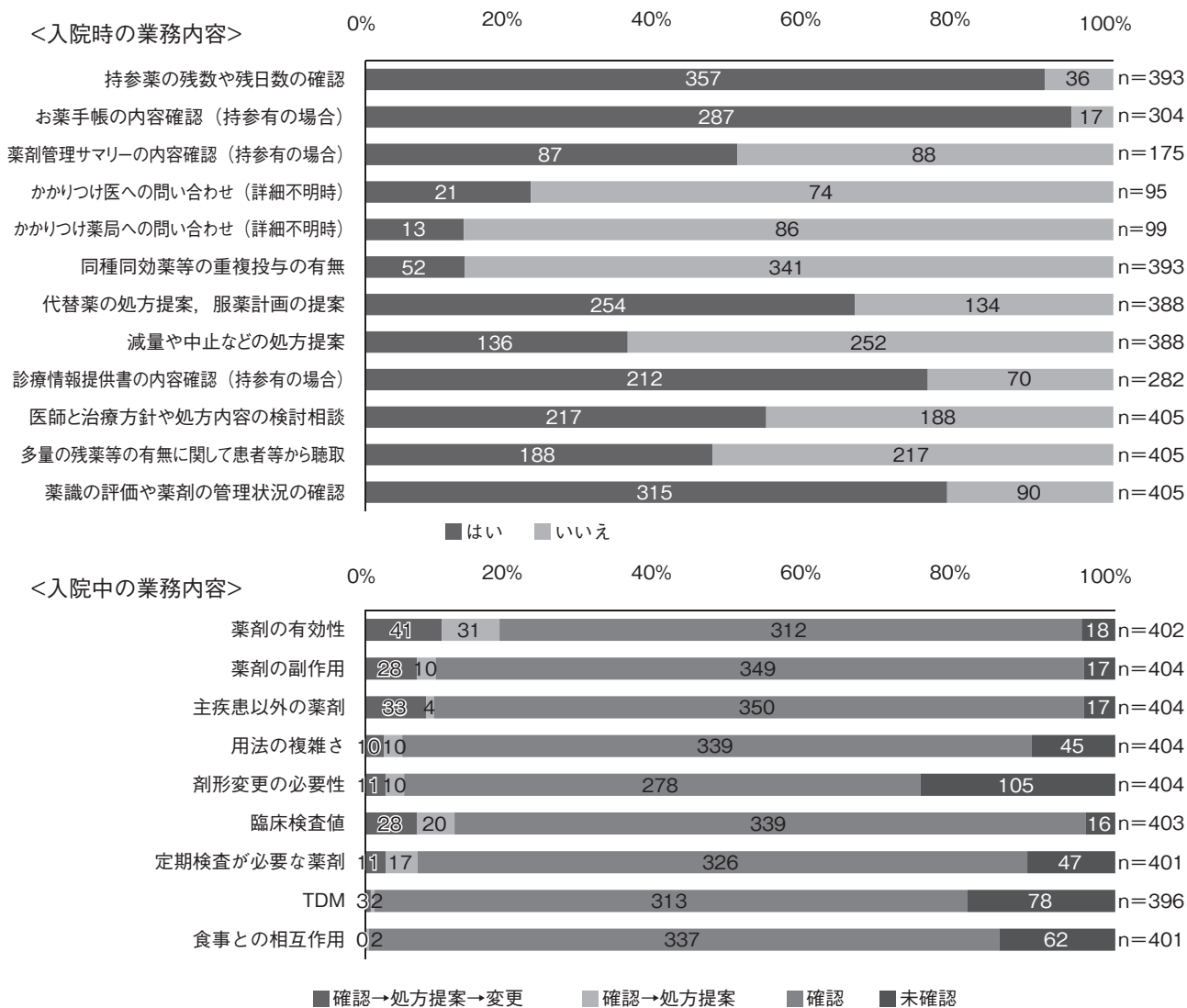


図4 入院時と入院中の業務内容

### 平成29年度の活動予定

多剤投薬の患者に対して、外来または入院時に薬剤師がどのような薬学的視点をもってかかわっていくと多剤投薬の削減や薬物有害事象の軽減に寄与できるのかを会員の皆様と共有するために以下のような取り組みを行う予定である。

- ①「多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の業務実態調査」の解析と学会発表や論文等による報告
- ②対応事例集の公開
- ③多剤投薬の患者に対する業務チェックリスト作成

### 謝 辞

今回の多剤投薬の業務実態調査並びに多剤投薬の患者に対する病院薬剤師の対応事例にご協力をいただいた多くの施設の皆様に心より御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 武藤浩司ほか：平成27年度学術委員会第1小委員会報告 ポリファーマシー対策にかかる薬剤師の関与並びに有用性の調査・研究, 日本病院薬剤師会雑誌, 52, 1219-1224 (2016).
- 2) 武藤浩司ほか：多剤投薬の患者に対する病院薬剤師業務実態調査-第1報-, 医療薬学フォーラム2017 第25回クリニカルファーマシーシンポジウム要旨集, 鹿児島, 2017, p.215.